

2. 検出された遺構と遺物

今回の調査では、広い面積を効率的に調査するため、5ヶ所に分散して調査区を設定しています（図1）。広い範囲を全て調査すると長い時間と多くの費用がかかりますが、この方法では小さい範囲を調査しつつ、掘っていない部分の状況は調査した範囲から想定することとなります。調査区は1～5区と命名しています。以下では、1区と2区～5区に分けて調査の成果を説明することとします。

1区

1区は、第20次調査地（昭和53年）と重複して設定しており、これまで建物群が検出されている第162次調査地・第166次調査地の西側にあたります。1区は、微高地の中でも東側や南側よりもともとの地形が低く、厚い包含層が堆積していました。

1区では上層遺構面と、下層遺構面、地山面の3つの遺構面が存在しており、これまで3世紀中頃以前の建物群が検出されているのは下層遺構面です。下層遺構面は人工的に造成されたとみられる黄褐色の粘質土ブロックを多く含む灰褐色土（以下、整地層）で構成されるもので、東から西へと徐々に低くなっていきます。

桜井市教育委員会では、第20次調査で検出されていた柱穴の一部の並びが、一連の範囲確認調査で検出した建物B、C、Dと方位を合わせることから、東西が3間（4.8m）、南北約8.3mの建物（建物A）の存在を推定していたため、建物Aの確認および居館域西側の遺構の状況を確認することを目的として調査を行いました。

柱穴群

1区では、整地層ないしその下の地山層上面から掘り込まれた多数の柱穴を検出しました（写真1）が、建物Aの柱穴推定位置からは柱穴が検出されず、想定していた形状の建物の存在は確認できませんでした。しかしながら、整地層上面から掘り込まれた多数の柱穴が確認できたことから、1区には何らかの建物遺構が存在する可能性が考えられます。建物遺構の構造については、調査面積の制約などから今回の調査では明らかにできていません。

井戸（SK-3001A、B）

1区の東側では、井戸とみられる遺構を検出しました。井戸は新古2度掘削されており、古い井戸（SK-3001B）は最下層に植物製の籠を設置していました。新しい井戸（SK-3001A）は古い方の井戸の埋没後に掘削されており、縦板を用いる木枠と堀方（木枠と掘った穴の間を埋める土）をもつ構造であったと考えられます。この時期の纏向遺跡の井戸で、縦板の木枠が認められる例は珍しいものです。また新しい井戸の西側には石群と溝が付属していました。新しい井戸は廃絶時に壊され、木材の一部が引きぬかれていました。検出面からの深さは0.9m、直径は約2mをはかります（写真2）。

2つの井戸の時期については、新しい井戸に堆積した土層から出土した土器の時期が布留0式期（3世紀後半）と考えられますので、新しい井戸の廃絶時期については布留0式期で、掘削時期は布留0式期を含めそれ以前と考えられます。なお、この2つの井戸が3棟の建物（建物B、C、D）に伴うかどうかは明らかではありません。



写真1 1区の柱穴群（南から）



写真2 井戸（SK-3001A、B）（北から）

2～5区

2～5区では、3世紀前半の建物群を含む居館域全体の区画施設の検出をめざしました。特に2区の北側に位置する第21次調査では、南北に流れる流路の東岸が確認されており、これが建物群の西限となる人工的な溝である可能性が指摘されていました(図1)。また、第173次調査で検出した3世紀中頃～後半に埋没した東西溝(SD-1001)の想定延長線が3区・4区を通るため、この東西溝の続きが検出できる可能性も考えられました。結果的には、建物群に伴う遺構は認められず、3世紀後半から4世紀の遺構が検出されました。以下では、検出した遺構の概要を述べたいと思います。

東西溝(SX-1001)

3～5区では、東西に伸びる溝(SX-1001)を検出しました。この東西溝は幅が約6.0mで、長さは約57mあります。この溝は3区で北側に折れ曲がり、さらに調査区外へと続くことがわかりました。この東西溝は、第166次調査、第168次調査で検出した南北溝と組み合わせ、微高地を区画するものと考えられます。5区では深さ約60cmが残存していましたが、3区では約20cmしか残存しておらず、西側では上部が後世に削平を受けているものと考えられます。この溝の下層の埋没時期は布留2式期(4世紀中頃～後半)であり、溝が機能していた時期もそれに近いものと考えられます。なお、区画溝の上層では5世紀前半の須恵器が出土しており、溝の跡であるくぼみは長く残っていたようです。

その他の遺構

また、3区・4区では、直径が2m～3m程度の土坑(SK-1001、SK-1004など)を複数確認しています。これらの土坑は布留0式期(3世紀後半)に埋没したものが多く考えられますが、現時点では、厳密に時期を特定できていません。また、2～5区では1区のような柱穴はほとんど認められませんでした。



写真3 東西溝西側コーナー(西から)



写真4 SK-1001(北から)

3. まとめ

今回の調査では建物群の南西側と西側の様子を知る事ができました。知見を順に挙げると、

- ① 1区では多数の柱穴や井戸を検出しています。しかしこれまで想定していた建物Aの柱穴推定位置からは柱穴が検出されず、建物Aの存在は確認できませんでした。ただし多数の柱穴が認められることから、何らかの建物遺構が存在したことが想定できます。井戸については建物と共存したかどうかは明らかではありません。
- ② 2区～5区では、居館域の全体の区画施設の検出を目的としていましたが、区画施設は認められませんでした。また、1区で検出されている多数の柱穴は2区～5区では認められず、一定の空地が広がっていた可能性があります。
- ③ 4世紀中頃から後半に埋没した東西溝(SX-1001)は、微高地の東側と南側、西側の一部を取り巻く大規模な区画溝の一部であることが判明しました。これまでの調査では、区画溝の内側に同時期の遺構は検出されておらず、区画の内側に何があったのかは不明ですが、各地の似たような例を参照すると、首長居館を囲う溝の可能性が考えられます。同じ地点に複数の時期にわたって居館が造営されているとすれば、この土地が居館の造営に適した立地であったことをうかがわせるものです。(森)



建物群西側の調査（纏向遺跡第175次調査）

纏向遺跡第175次調査は、176次調査1区の西側に接し、1段低くなったところでおこないました。北に隣接する纏向遺跡第21次調査では、東側に岸をもつ時期不明の流路が確認されており、建物群の西限を画する南北溝のような遺構の可能性が指摘されていました。

今回の調査では、176次調査1区の西の1段下った箇所での遺構の様子を把握することと、21次調査で想定された南北溝の西岸を確認するために2箇所トレンチを設定し、調査を行いました。調査区は西側を西区、東側を東区と名付けています（図1）。

西区では、3世紀後半に埋没したとみられる流路が見つかりました。21次調査で検出した流路と同じ流路を検出した可能性がありますが、西岸は検出できませんでした。

東区では、西区とは対照的に流路は見つからず、いくつかの穴が見つかっており、その一つは3世紀後半の穴であることがわかっています。176次調査1区のすぐ西側ですが、遺構の数は多くはなく、後世に削られているものと考えられます。（森）



写真5 西区（北から）



写真6 東区（北西から）

《纏向遺跡第176次調査現地説明会が開催されました!!》

纏向遺跡第176次調査の現地説明会が、平成25年2月3日に開催されました。前日まで雨が降り地面が濡れた状態でしたが、当日は一転晴れて良い天気となり、約1300人の方が来場されました。

現地説明会に来られた方々には、出土した遺物や遺構の説明を聞いていただきました。今回は分散した調査区配置となっていましたので、広場で全体の説明を聞いていただき、その後各調査区をめぐるご案内いただきました。また、4世紀の区画溝や柱穴群の性格についてなど、皆さん熱心に検出した遺構や遺物について質問されていました。



写真7 現地説明会の様子

《テントをご寄贈いただきました!!》

川口由一様より、纏向学研究センターにテントをご寄贈いただきました。川口様は纏向遺跡第166次調査地、168次調査地、170次調査地の土地の所有者で、範囲確認調査に際しましては、多大なるご支援をいただいております。

ご寄贈いただいたテントは、長さ5.4m、幅3.6mのもので、屋根に桜井市のカラー、えんじ色で「纏向学研究センター」のロゴがあらわれています。早速纏向遺跡第176次調査の現地説明会にて使わせていただきました。今後も大切にさせていただきます。大変ありがとうございました。



写真8 ご寄贈いただいたテント

《纏向考古楽講座を開催しました》

纏向学研究センターでは、平成24年の秋に3回にわたって纏向考古楽講座を開催しました。纏向考古楽講座は、これまで考古学や歴史に興味があってもあまり触れることのなかった方を対象としたもので、考古学者がどのように、何を考えているのか、実際の遺物を触ったり、纏向遺跡を歩くことで体験して頂きました。講座には小学生から年配の方まで幅広く参加していただくことができました。

初回は考古学について、「型式学」と「層位学」という考古学で最も重要な考え方を実際に土器に触れながら考えて頂きました。2回目には実際に纏向遺跡を歩いて、どういったところに昔の痕跡が残っているのか見て頂きました。普段見慣れた風景の中にも、実は古代の痕跡が眠っていることを皆さん実感しておられる様子でした。中には、土器のカケラを見つけた方もおられました。3回目には、纏向遺跡がもつ未だ考古学者も解決できていない「謎」について考えて頂きました。皆さんグループごとに熱心に討論していただき、最後に自説を発表してもらいました。

平成25年度も纏向考古楽講座を開催する予定ですので、お近くにお住まいの方は是非御参加ください。



写真9・10 第2回の講座の様子

《纏向学センター設立記念 東京フォーラム開催!!》

平成25年2月10日に東京のよみうりホールにて『桜井市纏向学研究センター設立記念 東京フォーラム 纏向出現 - 纏向に卑弥呼がいたなら -』を桜井市の主催、読売新聞社の後援により開催し、約800人の方々にご来場いただきました。

このフォーラムでは、愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎先生、国立歴史民俗博物館の広瀬和雄先生、日本考古学協会会員で俳優の苅谷俊介さんをお招きし、もし纏向に卑弥呼がいたなら、考古学上の様々な現象をどういう風に解釈できるのか、お話し頂きました。まず、基調報告として橋本輝彦所員より「纏向遺跡の特質と邪馬台国」と題した講話があり、続いて講師の赤塚次郎先生より「ヤマトと狗奴国」と題してご講演をいただきました。午後は、広瀬和雄先生より「卑弥呼とヤマト王権 - 初期前方後円墳と邪馬台国 -」と題してご講演をいただき、その後は、パネラーに講師の皆様に加え、苅谷俊介さんをお迎えし、寺沢薫纏向学研究センター所長をコーディネーターとして「纏向に卑弥呼がいたなら」をテーマにシンポジウムを行いました。

平成25年度は、11月に「卑弥呼は九州にいたか？」をテーマに、東京フォーラムを開催する予定です。九州に卑弥呼がいたなら纏向遺跡はどのように位置づけられるのか、九州から論客をお招きし、考えてみたいと思います。詳細は追ってホームページやチラシで案内させていただきます。ご期待ください。

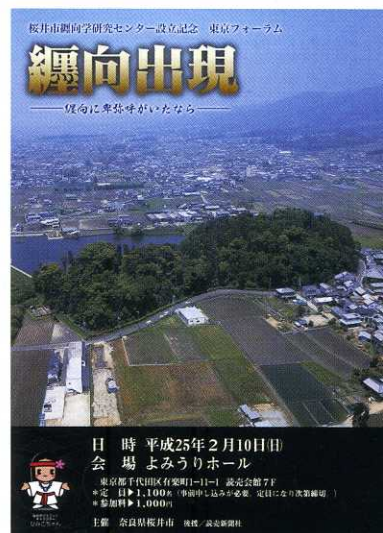


写真11 当日の様子

《第1回 定例研究集会を開催しました》

平成25年2月23・24日に、纏向学研究センターにて、第1回纏向学研究センター定例研究集会を開催しました。定例研究集会はセンターの研究事業のひとつとして、桜井市教育委員会が委嘱した非常勤の共同研究員の先生方にご参加いただき、研究発表や意見交換などを行うものです。先生方には考古学だけではなく、幅の広い見地から共同して研究するため、各学界の一線の研究者をお招きしています。

今回はその第1回目の研究集会ということで、1日目は共同研究員の奥田尚先生に「土器胎土から見た生産地の推定」と題してご発表いただきました。その後は皆で纏向遺跡出土土器の検討を行い、その際に奥田先生から胎土（土器の原材料として用いられた土や砂）の観察についてレクチャーを受けました。どういった胎土が纏向で作られた土器なのか、さらなる産地の特定についてなど、活発な意見が交わされました。

2日目は、橋本・丹羽・森・武田所員からの資料報告の後、共同研究員の金原正明先生より「畿内における植生環境と纏向遺跡の特殊性」と題してご発表いただきました。纏向遺跡の植生がどのように変遷し、周辺の遺跡とどこが違うのか、検出した花粉や種子から具体的にご報告いただきました。

定例研究集会は、原則として年1回の開催を予定しており、臨時の研究集会の開催も含め、研究の質の向上に努めていきたいと思います。また、今回の研究発表の一部は纏向学研究センター紀要に掲載した論考に反映されていますので、ご興味のある方は、ぜひご覧ください。



写真12 纏向遺跡出土土器の検討風景



写真13 所員による資料報告

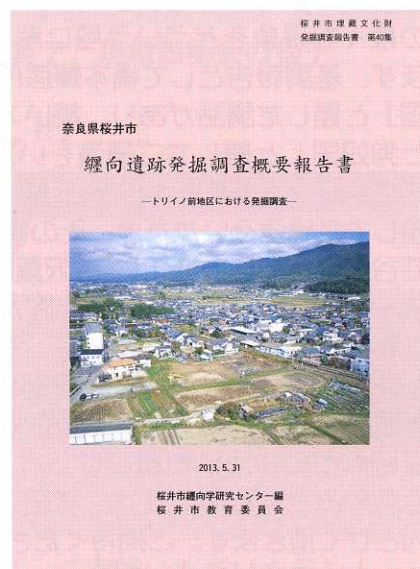
《纏向遺跡発掘調査概要報告書を刊行しました》

纏向遺跡の範囲確認調査の概要報告書、『纏向遺跡発掘調査概要報告書－トリイノ前地区における発掘調査－』が刊行されました！！

この報告書では、これまで纏向考古学通信や現地説明会などでご報告してきました、3世紀前半とみられる建物群や、桃の種が多量に出土した大型土坑の調査概要のほか、今号でご報告した第176次調査までの最新の調査成果を掲載しています。

この報告書は現時点でわかっていること、考えられる事をまとめたものです。これまでの調査で出土した土器などの資料が非常に多く、未だ整理途中にあるため、正式な発掘調査報告書は今後刊行する予定です。

報告書にはカラー写真を多く使っており、一冊でこれまでの調査の概要がわかる内容となっておりますので、是非ご覧ください。全国各地の大学図書館、埋蔵文化財センターに送付している他、桜井市立埋蔵文化財センターにて販売しております。本の購入をご希望の方は、本号の8ページ「刊行物のご案内」をご参照下さい。



《縄向学研究センター紀要第1号刊行!!》

縄向学研究センターでは第1号の紀要を刊行しました。この紀要は、縄向遺跡に関連する調査・研究成果を報告するもので、所員をはじめ第一線で活躍されておられる各学界の研究者の論考が掲載されています。

紀要には考古学だけではなく、岩石学や植物学、材質分析など、様々な分野の先生方に執筆していただき、縄向遺跡出土土器や巾着状布製品、縄向遺跡の植生について新たな見解や報告があきらかにされています。また、縄向学研究センター所員からは、縄向遺跡第149次調査出土の木製仮面や、大福遺跡出土仮面状木製品の報告など、世間の注目を集める資料の報告も掲載しております。専門的な論考・報告ばかりですが、縄向遺跡をめぐる最新の研究状況が把握できる一冊となっております。

今後も紀要の刊行を継続する予定ですので、ご期待ください。なお、各地の博物館、埋蔵文化財センターや図書館に配布しておりますので、是非一度手に取ってご覧ください。また、縄向学研究センターのホームページにて公開も予定していますので、是非ご覧ください。



《「縄向学」を商標登録しました!!》

桜井市では、縄向学研究センターが用いている「縄向学」という名称を平成24年（2012）11月16日付で商標登録しました。「縄向学」は、縄向遺跡とその周辺地域の調査と研究を充実させ、そこから、この国の成り立ちや歴史、文化の原像を解明するための横断的な学問を意味しています。

行政機関がこのような商標登録をおこなうことは比較的珍しいことですが、これは「縄向学」の名称に対して商業的な利用に一定の制限をもうけ、より学術的な分野に使いやすくしようとするものです。電子出版物を含む印刷物や講演会、セミナー、イベント、研究集会などで「縄向学」の名称を使うことをご希望の方は、当センターまでご連絡ください。



《縄向遺跡に案内板・解説板・誘導板を設置しました!!》

平成25年3月に、桜井市教育委員会では縄向遺跡に案内板・誘導板を設置しました。案内板はJR巻向駅西側の広場（メクリ地区）に設置しています。また発掘調査が行われている辻地区の居館域にも解説板を設置しています。案内板には遺跡全体のマップの中におすすめの散策ルートを表示し、ルートの各所には誘導板を設置しています。

また、解説板はこれまでの調査が一目でわかるようになっています。これまでに比べて、ぐっと縄向遺跡がめぐりやすくなりましたので、是非足を運んでいただけたらと思います。



写真14 メクリ地区に設置した案内板

《纏向遺跡を掘る調査員たち4》

桜井市の調査員の紹介コーナーです。このコーナーでは、普段はあまり知ることのない発掘調査や報告書の作成に携わっている人々について紹介しています。今回は、纏向考古学通信第4号でご紹介した、纏向遺跡第174次調査を担当した丹羽さんをご紹介します。

丹羽 恵二 (にわ けいじ)

発掘調査は古代の人を直接感じることができる作業です。ただ、調査により判明した新たな考古学的事実を世間に公表するとき、調査員の解釈の仕方によって結果が大きく異なる場合があります。如何に客観的に分析し、正確な情報を皆様に提供できるか、調査員をやっていく上での大きなテーマです。調査を担当することになって10年がたちますが、未だ満足なやり方を見つけておりません。日々、発掘調査の難しさを感じつつも、未知との遭遇にわくわくしながら、頑張っていきたいと思います。

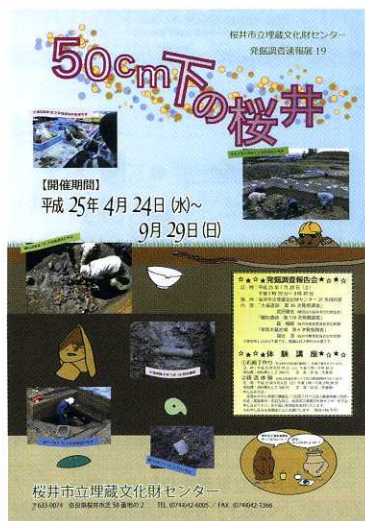


埋蔵文化財センター展示収蔵室からのお知らせ

埋蔵文化財センター展示収蔵室では、平成25年9月29日(日)までの期間、『発掘調査速報展19 50cm下の桜井』と題して、平成24年度に桜井市内で行った発掘調査の速報展示を行っています。

本号でご紹介した纏向遺跡第176次調査出土の遺物の他、第4号でご紹介した纏向遺跡第174次調査の3世紀後半に遡る鉄器生産関連遺物、桜井市南部に位置する談山神社関連の遺物、唐古・鍵遺跡に次ぐとも考えられる弥生時代の大集落・大福遺跡の調査成果、新たに渡り土堤が見つかった茅原大墓古墳の調査成果など、盛りだくさんの内容となっておりますので、是非ご来館頂きますようお願い申し上げます。

開館時間 9:00～16:30 休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日 7月16日(火) 17日(水)、9月17日(火)、18日(水) 24日(火)、25日(水) (祝日は開館いたします。) 入館料 / 大人200円 小・中学生 / 100円 20名以上の団体は大人150円 小・中学生50円 お問い合わせ先 TEL0744-42-6005 (財) 桜井市文化財協会



刊行物のご案内

埋蔵文化財センターでは纏向遺跡をもっと知りたい方のために以下の図書を頒布しています。

ガイドマップ『改訂第4版 纏向遺跡へ行こう!』200円(2011年2月に改訂)

『ヤマト王権はいかにして始まったか』学生社 2,460円

『大和・纏向遺跡』第3版 学生社 10,500円(2011年5月に新版発売)

『纏向遺跡発掘調査概要報告書・トリイノ前地区における発掘調査・』1,000円

※今号で紹介した紀要についてはホームページにて公開しております。

※ご購入方法は 桜井市立埋蔵文化財センター内 (財) 桜井市文化財協会までお問い合わせください。

お問い合わせ先 TEL 0744-42-6005 FAX 0744-42-1366



編集後記

第5号をお届けいたします。今回は発掘調査の他、書籍の刊行のお知らせやイベントを多く掲載しています。纏向学研究センターが設立されて1年が経ち、昨年は、東京フオーラムや纏向考古楽講座など、読者の皆様に接する機会の多い一年でした。また本号編集の6月には、纏向遺跡の史跡指定への答申がなされました。今後も、わかりやすくかつ丁寧な広報活動を心がけて行きたいと思います。(M)

纏向考古学通信 Vol.5

発行 平成25年7月1日

編集 桜井市纏向学研究センター

〒633-0085 奈良県桜井市東田339

TEL 0744-45-0590

FAX 0744-45-0590

ホームページ 纏向学研究センターで検索!



纏向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふさと寄附金」を活用して作成し、ご寄付いただいた方に配布しています。